



中国朝鮮族の弁士・海元の生涯と日記：毛沢東時代を中心に

著者	? 仁鎬
雑誌名	同志社コリア研究叢書
巻	3
ページ	142-179
発行年	2017-03-24
権利	同志社コリア研究センター
URL	http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016104



中国朝鮮族の弁士・海元の生涯と日記：毛沢東時代を中心に

著者	? 仁鎬
雑誌名	同志社コリア研究叢書
巻	3
ページ	142-179
発行年	2017-03-24
権利	同志社コリア研究センター
URL	http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016104

4 中国朝鮮族の弁士・海元の生涯と日記

—毛沢東時代を中心に—

ヨム イノ
廉 仁 鎬

1. はじめに

中国朝鮮族の歴史を研究してきた私は、延辺朝鮮族の弁士・崔海元^{チェヘウオン}(1937～?)が書いた大量の日記帳を発見し、とても興奮した。それはなによりも、彼の内面世界をのぞき込めるのではないかという期待を抱いたからであった。毛沢東の時代、当時発行された印刷物を通じて個人の内面を知るのとは簡単ではない。資料として一般に使用される新聞や雑誌類は党の宣伝物だったので、人間の内面世界がストレートに反映された文章を目にすることは極めてまれである。

もう1つの理由は、歴史史料としての価値にある。海元は、小学校と中学校、そして1年の簡易園芸大学出身という学歴のもち主であったが、日頃から学びの姿勢を維持しつづけた誠実な人物であり、世の中の問題に多くの関心をもつ知識人であった。彼の日記には当時の歴史的に重要な事件が豊富に記録されている¹。

ところが海元の日記を何度も読み返していると、それは内面世界を書き

¹ 海元の日記(以下、『日記』と記す)を使った論文には次のようなものがある。廉仁鎬「조선족 변사 海元の 활동 분석을 통해서 본 1960년대 상반기 연변조선족 사회와 한반도와의 관계」『한국근현대사연구』67, 2013 (以下、廉仁鎬 (2013b)); 廉仁鎬「조선족 변사의 北京, 拉薩, 日喀則 訪問 日記를 통해서 본 서장 장족 사회의 변동 (1950-1965)」『한국학 논총』39, 2013. (以下、廉仁鎬 (2013c))

つづいたいわゆる普通の日記とは性格が異なっていることに気づく。海元が生きた時代は一時、日記の執筆とその回覧が奨励され、海元もそのような風潮のなかにいた。他人に見られるということを前提に書かれたものであるとすれば、はたして日記の真実性をどう考えるかという問題が生まれる。海元日記を史料として用いるためには、史料批判をともなった分析が必要であろう。

本稿では、海元の日記を彼の人生との関連のなかで考察する。彼はどのように生き、それによって日記はどのように書かれたのか。また逆に、日記を書くことが彼の生き方にどのような影響を与えたのか。紙幅の都合上、毛沢東時代に限定して検討を行った。

本文は、政治・社会的な環境を基準に分けられた3つの章からなる。第2章では日帝が敗亡し、中国共産党八路軍が延辺に到達した1945年の下旬から、朝鮮族人民が生きる道を求め北朝鮮に大量に不法移住、すなわち脱中入北した1962年までを扱う。ただしこの時期に書かれた80余冊の日記帳は現在に伝わっていないので、主な特徴のみを〔のちの日記の回想的記述から〕推しはかって記述した。第3章では、農村社会主義教育運動期を取り上げる。中国共産党中央は1963年2月に農村社会主義教育運動の実施を決定し、同年7月以降に中央と地方で大々的にそれを実行した。この時期の日記は正規の日記帳30冊が残っている。第4章は、プロレタリア文化大革命の期間（1966.5-1976.10）を検討する。10年にわたる文革期間のなかで海元が精力的に活動した1968年夏までの2年間をもっとも集中的に検討する。1966年のものは正規の日記帳1冊が、1967年は正規のもの7冊と非正規のもの5冊が、1968年は正規3冊、非正規2冊が残っている²。

² 「正規の日記帳」と「非正規の日記帳」という用語については4章の2節で解説する。

2. 8. 15解放から「外流」までの時期

(1) 北朝鮮、兄、文学

海元は、1937年に満州国間島省延吉県徳新郷で生まれた。7歳の頃に和龍県に引越してからは、生涯のほとんどを同地で過ごした。そこで小学校と中学校、そして簡易園芸大学に1年間通い、1959年3月に和龍県移動映画放映隊（映写隊）に就職後、ながいあいだ放映隊の解説員（弁士）として活動した。1982年からは和龍市内の映劇院の経理として一定期間活動し、1998年5月をもって映画界から退いた。

日帝期、和龍県は、間島省の5つの県のなかでもっとも朝鮮半島に似た地域であった。和龍県から狭く長い^{トゥマンガン}豆満江を渡るとすぐに朝鮮半島であった。5県中朝鮮人の割合がもっとも多かった。1933年現在、和龍県の5つの郷社の総人口は11万3,190名であったが、そのなかで朝鮮族は10万921名で全人口の89.16%を占め、漢族などその他の民族は1万2,269名で10.84%に過ぎなかった³。

地理的な近さに加え人口の絶対多数が朝鮮人（朝鮮族）であったことから、和龍県は日帝期につねに抗日武装闘争の現場でありつづけた。青山里戦闘が展開された場所（1920）であり、満州で初のソビエトが設立された場所（1930）であり、紅旗河戦闘が行われた場所（1940）であった。1964年6月30日現在和龍県の人口は17万8,923名であり、うち朝鮮族は11万9,480名で全体の66.78%、漢族は5万8,349名で全体の32.61%を占めていた⁴。

海元の人生のなかで北朝鮮とのつながりは非常に重要であった。北朝鮮は一時彼の希望を実現しうる場所として認識されもしたが、彼に苦痛をもたらした場所でもあった。

³ 和龍県地方志編纂委員会編『和龍縣志』長春：吉林文史出版社、1992、81頁。

⁴ 和龍県地方志編纂委員会、前掲書、82頁。

海元は1957年3月、そして1962年8月に豆満江を渡り、北朝鮮を不法に訪れた。北朝鮮に行ったのは第1に、兄とのつながりのためであった。独立軍の隊員の娘であった彼の母親李氏（1910-2001）は、はじめは鄭氏と結婚し1女1男（ヨンホ〔兪立〕）をもうけた。この初婚の夫が死んだ後、彼女は扶安崔氏と再婚し、1女1男（海元）を産んだ。海元が7歳の頃に実父が亡くなると、生活のため、母は子どもたちを連れて和龍県の金氏と3度目の結婚をした。義父となった金氏は海元が中学卒業を目前にひかえた1954年夏に死亡した。

唯一の男兄弟であるヨンホ（1930-1971）は、海元にとって誇らしく、父のように頼もしい存在であった。兄ヨンホは1947年に延辺で中国共産党の軍隊である東北民主連軍に入隊し、国共内戦に参加した。兄は四平戦闘（1948）と平津戦役（1949）に参戦して大きな功績を残し、海南島の解放戦闘にも参加した。それらの業績が認められ、1949年2月27日には19歳の若さで中国共産党の党员となった⁵。兄は1950年春に所属部隊の北朝鮮への移動とともに入北し、人民軍の一員として朝鮮戦争に参加し、停戦後には北朝鮮で人民軍将校となって勤務した。海元は北朝鮮人民軍の将校である兄を、自分を救済してくれる存在として認識しており、兄は海元が歩むべき道を照らしだす精神的支柱であった⁶。

母は慈悲深く徳の厚い人物であったが、夢が大きく「頑固な」海元に対して決定的な影響力をおよぼすことはできなかった。海元は義父が自分をかわいがってくれているという事実を知ってはいたが、貧しかった彼に大した期待は寄せていなかったようだ。しかも早くに他界してわずかながらも頼ることができなくなると、兄への期待はますます膨らんでいった。

1956年に兄が休暇で和龍に戻ってくると、勉強がしたいので北朝鮮に連

⁵ 『日記』1965年7月20日付。

⁶ 『日記』1964年2月27日付；1965年7月20日付。

れて行ってほしいと頼んだが、兄の返事は待てというものであった。翌1957年3月、待ちきれなくなった海元は書籍を包んだふろしきをかついで豆満江を渡り、休戦ライン付近で勤務する兄を訪ねたが、またもや待てという兄の「指示」を受け、涙を吞んで延辺に引き返した⁷。

1962年8月、彼は再び豆満江を渡った。このときに越境したのは海元だけではなかった。1961年から1962年にかけて、大量の満州朝鮮族人民が豆満江や鴨緑江^{アムノツカン}を越えて北朝鮮に渡った。大躍進運動の失敗、3年間つづいた自然災害によって中国全土が飢餓にあえぎ、多くの餓死者を出した。そんななか新疆など中国国境地帯の少数民族人民の脱出は急激に進んだ。脱中入北した朝鮮族人民は5～6万名とされている⁸。延辺の朝鮮族幹部たち、しかも延辺朝鮮族自治州の現職副州長すらも北朝鮮に不法入国した。当時中国では朝鮮族の脱中入北を「外流」と呼んでいた。海元の入北は、この外流の流れに便乗したものである。海元もまた経済的な事情に苦しんでいた。そのため母の分だけでも口減らしをしようと、兄から母受け入れの同意を引き出すのが北朝鮮に行った目的の1つであった。

2つ目の目的は、作家となる夢を実現するためであった。海元は雄弁であり、その才能は生まれもったものだった。幼少の頃、母方の祖母の家で夜通し会話に耳を傾けては、それを友人たちに巧みに語り聞かせた過去をずっと記憶していた⁹。小学生の頃から文学に関心があった。貧しかった海元にとって、文学は現実を超越することのできる唯一の突破口だったようである。小学校高学年のときに北朝鮮の作家趙基天・閔丙均^{チヨギチョン ミンピョンギョン}の模倣詩を詠み、先生や学生たちを感動させたという¹⁰。中学校に入ると、作家を夢

7 『日記』1964年7月9日付。

8 廉仁鎬「재만 조선인 항일투쟁사 서술과 ‘중국 조선족’의 탄생」『동아시아 한국학의 분화와 계보』소명출판, 2013. (以下、廉仁鎬 (2013a))

9 『日記』1963年8月17日付；1980年4月4日付；1999年2月1日付。

10 『日記』1963年8月7日付。

見る理想主義者となった。日記によると、「朝鮮語の先生キム・ヨンホ〔召魯呼〕先生の多くの啓発と支援のもと、文学に志をもつ」ようになり、「キム・チュンテク〔召呑喫〕先生」からは、青年は大きな理想を抱くべきであり、それがなければ「一生を無意味に過ごすという教育」を受けた¹¹。

だが義父の死亡により高校進学に挫折すると、納戸に籠もって日記を書くようになった。1959年3月に和龍県の移動放映隊に就職したが、作家の夢はあきらめてはおらず、1962年8月朝鮮族人民の「外流」に便乗して豆満江を越えたのである。当時海元は平壤^{ピョンヤン}を訪問して抗日パルチザンの女性隊員であった金明花^{キムミョンファ}に会い、彼女に関する作品を書き、それを背景に北朝鮮で作家学校に通うつもりであった¹²。ところが平壤には着いたが縁故がなく、金明花にはついに会うことができなかった。その後、平壤歴史博物館を訪れたが、そこの館長が昨年9月まで延辺自治州の副州長を務めた石東洙^{ソクトンス}だということを知る¹³。そして開城^{ケソン}の兄に会い、ふたたび豆満江を渡って和龍に帰着した。

帰郷後はもういちど北朝鮮に渡る準備をはじめた。今度は平壤の歴史博物館の石東洙と関係を作ろうとした。海元は歴史博物館の解説員になることを夢見た¹⁴。石東洙はもともと金日成^{キムイルソン}が率いた部隊の隊員であったが、解放後は延辺でさまざまな官職についた。1961年9月には自治州の副州長の身分で北朝鮮に入った¹⁵。このような脱中入北は、当時の満州朝鮮族社会がいかに劣悪な状況であったかを物語るものであるが、それは中国当局に対しても大きな衝撃を与えただろう。文革時に石東洙は、「国を裏切り

¹¹『日記』1964年7月9日付。

¹²『日記』1968年8月24日付。海元は早くに『敦化の樹林のなかで』という金明花の回想記を讀んでおり、それをもとに「映画のシナリオ」を書こうとした（『日記』1968年7月29日付）。

¹³『日記』1968年7月29日付。

¹⁴『日記』1968年8月24日付。

¹⁵中共延邊州委組織部の編著『중국공산당연변자치주 조직사』연길：연변인민출판사，1991，255쪽.

投降（叛投）した反華の頭目」と非難された¹⁶。

北朝鮮から帰ってきた海元は、延吉に居住する石東洙の家族たちと積極的に接触しようと試み、彼らが入北するのであればついていく考えであった。しかしそれは叶わなかった。現実的に入北は困難であり、徐々に海元は中国に定着する方向で気持ちを固めていった。

（2）失われた82冊の日記と「不穩」な内面世界

海元は小学校4年生の頃から日記をつけはじめた¹⁷。学校当局が教育の一環として児童に日記を書かせたのであろう。おそらく日記の訓練は日帝期からあっただろうし、それが解放後も満州や南北朝鮮で継承されたようである¹⁸。

海元は中学生になってからも日記をつけていたが、劣悪な家庭環境のせいで高校進学に挫折すると、「慨嘆とため息のただよう日記を農村の納屋の片隅で書き、日記の上に嘆息の涙をまき散らした」¹⁹。日記は挫折した現実に対する鬱憤を吐露する場であった。孤独だった彼にとって、日記帳はほとんど唯一の友だちであったろう。また、日記を書くことは文学の訓練という意味もあったであろう。

日記の執筆はその後、1956～58年の簡易園芸農業大学在学時にもつづけられた。1959年3月、和龍県放映隊の解説員に就職した後もそれはつづいた。1963年3月末の日記には、解説員になった後「日記は4年間1640日間書いた」とある²⁰。就職してから4年半のあいだ、ほとんど毎日書きつづけ

¹⁶『日記』1968年8月17日付。

¹⁷『日記』1964年7月9日付。小学2年のときに書きはじめ、4年生になるとほぼ毎日のように書いたという記述もある（『日記』1999年1月1日付）。

¹⁸韓国では李潤福日記（1963年）が有名である。李潤福もまた担任の先生の指導により日記をはじめた。이지호 「윤복이 일기의 재평가」 『문학교육학』 17, 2005.

¹⁹『日記』1982年10月11日付。

²⁰『日記』1963年9月29日付。

たのである。

ところが1963年7月28日以前の日記は現在まで残っていない。同日以前の日記帳はすべて文化大革命によって失われてしまった。現在残っているのは第83巻（1963.7.28-10.3）からである。文革の際に消失した日記帳は第1～82巻まで、すなわち82冊にも上る。のちの日記によると、文革時に家族写真と北朝鮮から送られてきた「兄の手紙」、そして「私の日記」を「すべて火に入れ」たという²¹。

また別の日記によると、文革時に海元のもっていた財産といえば中学生の頃から小銭を集めて買った数冊の本と、小学校時代から書いてきた日記帳であった。それなのにこれらの日記は「反動日記」として批判されたという。同じ日の記録によると、彼が所有していた「本はみな‘毒草’として火の中に投げ込まれ」たというが²²、おそらくこの時に日記帳も一緒に焼かれたのであろう。それにしても日記帳にはどのような内容が書かれていたのか。いかなる記述が問題となり「反動日記」として非難されたのだろうか。

焼却された1963年以前の日記帳は、その後の日記帳とは異なり、内面世界を率直につづっていたことは間違いない。その後の日記では、文革による日記の焼却を非常に悲しんでいる。それは海元が10歳の頃から書きはじめたものであり、「私生活記」であり、「死ぬ時も棺の中に入れて持っていくという世のいかなる秘密もすべて書くという自白書、生の記録」であった²³。

単なる私生活記であったならばあのように反動日記とは認識されなかったであろう。そこには、文革時に決して許されなかった、中国が祖国では

²¹『日記』1999年2月3日付。

²²『日記』1980年2月3日付。

²³『日記』2004年3月26日付。

なく北朝鮮が祖国であるという北朝鮮祖国観が根底にあり、金日成を崇拜する内容が書かれていたのである。そのような内容は、海元に災いをもたらし、焚書の原因を提供したのである。

北朝鮮のスパイとされた1968年8月、海元の日記帳は一般群衆に公開された。そこには「金日成を赤い太陽」であるとし、「朝鮮」すなわち北朝鮮を祖国と呼んだという内容がある²⁴。これによって、「世界でもっとも幸福な毛主席のいらっしゃる偉大な祖国中華人民共和国に暮らしながら朝鮮を祖国である」とした海元は、「身体は中国にあるが頭は朝鮮に行っている奴」という非難を受けた²⁵。

また、日記には朝鮮族の祖国は北朝鮮であり、日帝期に延辺の朝鮮族は金日成の領導のもと抗日武装闘争を展開したとも書かれている。具体的には、延辺朝鮮族の祖国は「朝鮮」であるが、「日帝の奴らに仕方なく追われて中国に来た」のであり、彼らは「祖国を取り戻すため」金日成の領導のもと抗日武装闘争を展開し、結局「日帝の奴らを追い出して祖国を取り戻し、社会主義国家を建立した」という内容である²⁶。このような文章は、「毛主席と中国共産党の領導のもとに延辺抗日武装闘争が進行した」という公式説明に反するもので、また「延辺朝鮮族人民」は「祖国・中華人民共和国の大家庭の一個の少数民族」という毛沢東の言葉を全面否定する反革命的言辞として糾弾された²⁷。

以上みた海元の見解は、解放直後であったとすれば問題になりえないものであった。1948年12月、中国共産党延辺支部書記（漢族）は、自身が作成したある文書のなかで満州朝鮮人の祖国は朝鮮民主主義人民共和国であると明言した。また、6.25戦争が勃発し国連軍が38度線を越えて北に進軍

²⁴『日記』1968年8月17日付。

²⁵『日記』1968年8月17日付。

²⁶『日記』1968年8月17日付。

²⁷『日記』1968年8月17日付。

してくると、党延辺支部の機関紙は朝鮮人民に自分たちの祖国に帰って祖国を保衛しなければならないと訴えた。解放直後は満州各地の中国共産党占領地区の朝鮮人社会では、金日成崇拜が公然と行われていたのである²⁸。

しかし北朝鮮の祖国観や金日成崇拜は、1952年9月の延辺朝鮮族自治州成立以降は、次第に「不穩」視され、公的な場では語られなくなった。日記ではそれが可能であったが、文革時にはそれすら保護されなくなり、「不穩」な内容は公開され、罪証とされたのである²⁹。

3. 農村社会主義教育運動の時期

(1) 有能な弁士と党支部書記

1962年8月に北朝鮮を再訪した海元は、帰ってきてからも先に述べたようにしばらくは落ち着かず、もう一度北朝鮮を訪問するために努力した。しかし条件が整わず諦めざるをえなかった。

現存の日記でもっとも古い第83巻(1963.7.28-10.3)を見ると、北朝鮮に対する未練が残っていたことがわかる。7月29日の日記には、金日成部隊の女性隊員でもあった金明花を讃える長編詩がつづられている。また、10月3日の日記によると、親友と酒を飲みながら胸中を語り合った際、友人は来年北朝鮮に行くと言明した。しかし海元は、「本当に祖国に行くのであれば」「中国共産党の黨員になって」から行くと言った³⁰。その2日前の日記には、1967年頃に出発するだろうと書かれている³¹。これらの記述

²⁸ 以上については、廉仁鎬『또 하나의 한국전쟁 -만주 조선인의 '조국' 과 전쟁』(역사비평사, 2010)を参照。

²⁹ 「不穩」問題については、鄭炳旭『식민지 불온열전 : 미친 생각이 뱃속에서 나온다』(역사비평사, 2013)を参照。

³⁰ 『日記』1963年10月3日付。

³¹ 『日記』1963年10月1日付。

から、北朝鮮と中国のあいだで揺れ動く海元の姿が見てとれる。しかし次第に中国を離れるとの気持ちは薄れていき、中国に愛着をもつようになっていった。

北朝鮮行きの断念と中国への愛着には、1963年2月に中国共産党中央が決定した農村社会主義教育運動が密接に関わっている。詳細は後述するが、それまで海元は、山間部の村々を回りながら映画を上映・解説することには展望を見いだせないでいた。俳優の言葉を真似して再現する「オウム」のようであるとさえ思っていた³²。しかし社会主義教育運動が次のように進展するなかで放映隊の地位は著しく向上し、海元の職業に対する愛着は増していった。

1958年の大躍進運動の失敗により中国全土に飢餓が蔓延すると毛沢東の威信は低下し、一方で調整政策を推進した国家主席劉少奇の位相が高まった。^{プレゼンス}守勢に立たされた毛沢東は、階級闘争を忘れてはならないという主張をもちだしてきた。現在の難局は、社会主義革命に反対する旧支配層があちこちに潜伏し革命を妨害しているために起こったものだと説明し、階級闘争は継続されねばならないと主張した。こうして毛沢東は1962年9月、農村社会主義教育運動を発議し、党中央は1963年2月にその受け入れ実施を決めた。同年7月以降は、中央と地方の各級機関が大規模な工作隊を派遣し、県と人民公社において社会主義教育運動を展開するにいった³³。延辺では、6月末にすでに農村社会主義教育運動の試験事業が各県と市においてつぎつぎに始まっていた³⁴。

農村社会主義教育運動が展開され、農村の移動放映隊の役割も強化された。この点は1964年12月7日に北京で開かれた全国映画発行・放映工作会

³²『日記』1964年7月10日付。

³³ 이홍길 「뇌봉 (雷鋒) 학습운동과 그 배경」 『역사학연구』 10, 1996, 121쪽.

³⁴ 연변당사학회 편찬 『연변 40년 기사』 연길 : 연변인민출판사, 1989, 189쪽.

議である中国共産党中央宣伝部の副部長・周揚の演説から確認できる。彼は「社会主義建設のなかで文化領域における映画の作用はとてども」大きく、「映画はもっとも有力に、もっとも有効に教育する工具」であると述べた。とくに「社会主義教育運動」などの需要に答えるため積極的に革命素材の映画をつくり、「農村に広大な放映網を建立」しなければならないと主張した³⁵。

日記によると、社会主義教育運動が行われたこの時期、3～4名からなる放映隊はつねに人民公社の党幹部たちと協力しており、村に入るときには彼らの協力をえて村の敵対勢力と友好勢力を判別した。また、友好勢力を称賛する資料を用意し、村人をあつめて幻灯機〔スライド映写機〕で上映しつつ、解説のなかで敵対勢力が存在しているので階級闘争を忘れてはならないと強調していた。農村映画放映隊の解説員は、いまや人民の教育を担当する教師となり、党は「紅い宣伝員」となっていた³⁶。

農村社会主義教育運動が行われるなか、和龍県や延辺自治州、そして吉林省の党高位層は、この教育運動を先導するための模範を創造しようとした。海元はもともと和龍第4放映隊（勇化郷）の解説員であったが、和龍県の映画放映管理所（電影放映站）の党支部から和龍第1放映隊（徳化郷と蘆果郷）に転勤となった。それが1963年8月初めのことである。党支部はとくにこの第1隊に愛着をもっていた。和龍県映画放映管理所所長イ・フンソク〔이흥석〕は40代の中年であったが、第1隊の若い隊員たちと行動をとともにした。彼は映写機と発動機、フィルムなどを牛車に載せ、今日はこの村、明日は別の村へと移動して回った。あるときには高い尾根を登り、またあるときには千尋の断崖絶壁のうえを恐る恐る歩いて移動した。雪や雨で牛車が動

³⁵『日記』1964年12月7日付。

³⁶『日記』1964年5月8日付。海元の職場である和龍県映画放映管理所の傘下には、市内の映画館1つと8つの移動放映隊があり、管理所に所属する人数は40余名であった。一方、延辺全体には41個の移動放映隊があった（『日記』1964年8月16日付）。

けないときには隊員たちとともに装備を背負って登り、越えなければならなかった。

和龍県、延辺自治州、または吉林省の指導者たちは、海元の解説が無声映画時代の弁士に負けていない点を評価してこの第1放映隊に配置し、同隊を全国の少数民族から称賛される隊にしようと考えていた。第1放映隊が移動するときには吉林省、または中央からきた記者が同行取材し、同省または全国で報じられることがしばしばあった³⁷。農村放映隊の重要性が積極的に強調された社会主義教育運動期において、和龍、延辺、吉林省の指導者たちには、第1隊のような放映隊の模範を創り出すことで自分たちの政治的地位を固めるという目的もあったろう。同隊が注目されるほど、解説員海元の地位も高まっていった。

党中央の機関紙である『人民日報』1964年6月8日付では、「長白山の上の映画放映隊」という見出しの記事でこの放映隊の事績が扱われており、解説員海元にも言及されている³⁸。一方、中国映画発行・放映公社は、全国の少数民族映画宣伝事業現地会議を1964年8月に延吉市で開催した³⁹。海元は、この全国会議に代表として参加し、解説を実演してみせた。会議場の近くには「全国優秀移動放映隊である和龍第1放映隊の先進事績展覧館」が設置され、各少数民族の代表たちが観覧した⁴⁰。会議期間中、海元は漢族、藏族〔チベット族〕、蒙古族など、全国各地からきた民族代表たちと交流することができた。当時の日記には朝鮮半島人民のような朝鮮人としてのアイデンティティよりは、55の少数民族の一員としてのアイデンティティと自負心が強く表れている。

³⁷ 例えば北京からきた『民族画報』の記者は、1964年5月11日から4日間第1放映隊に同行取材した（『日記』1964年5月11日付）。

³⁸ 『日記』1964年6月14日付。

³⁹ 연변당사학회, 前掲書, 211頁。

⁴⁰ 同上。

海元の自負心をいっそう刺激したのは、1965年春に西藏に赴いて藏族の青年解説員を要請したことである⁴¹。同年10月の国慶節には代表に選ばれ、北京で毛沢東が直接査閲する天安門の門楼での示威行事に参加した。

海元のこのような出世には、和龍県映画放映管理所の鄭利敦党支部書記が大きな役割を果たした。彼が支部書記として赴任した1962年当時、和龍の映画系統の隊伍内では飲酒が問題となっており、中国での活動が安定せず北朝鮮に流出する現象が現れ、仕事における革命性、科学性、組織規律性が失われていた⁴²。大躍進運動の失敗、3年自然災害による飢え、そしてそこから抜け出すために蔓延した脱中入北現象などが、映画系統においてもそのまま出現したのである⁴³。海元もまた当時は愛飲家であったし、先述のように不法に北朝鮮に行ったりもした。海元は「オウムのように」「他人の言葉をモノマネする解説」に嫌気がさしはじめ、農村放映隊には希望がないと周囲に言いふらした⁴⁴。新任の支部書記は社会主義教育運動とともにこのような傾向を是正していった。

海元を改心させた「事実」は新聞でも記事化された。『延辺日報』1964年7月29日付には「人々の心の中にある支部書記」という見出しの記事が掲載されたが、そこでは支部書記が海元に対して「20余回の教育」を施したとされている⁴⁵。その内容は、「頑固で落後した人物」、すなわち問題の多い人物である海元に対して忍耐強く教育を施し、党の政策を忠実に遂行する有能な紅い宣伝員に育て上げたというものであった。

⁴¹ これについては、廉仁鎬（2013c）を参照。

⁴² 『日記』1967年4月24日付。

⁴³ 食糧難が深刻だった1961年、海元は「木の皮のおかゆ、稲くずの餅、松の皮を食べ」て映画解説を行い、途中で「倒れたこと」もあったという（『日記』1963年8月17日付）。

⁴⁴ 『日記』1964年7月10日付。

⁴⁵ 『日記』1964年7月30日付。

(2) 日誌としての日記

約3年分の農村社会主義教育運動期の日記帳は正規のものが30冊にのぼるが、それらは次のような特徴をもっている。

第1に、毎日の活動状況を客観的に記録した日誌としての性格をもつ。この期間の日記には膨大な事実が細かく記録されている。例えば各地の農村を訪ねて移動する過程、到着して村を理解する過程、映画の上映と解説、群衆座談会と映画に対する反応などが記録されている。また、延吉市で少数民族映画宣伝事業現場会議が開かれると、その時にあった出来事が詳細に記録された。北京に行ったときには故宮、明十三陵、頤和園、少数民族展覧館などの観覧記、中央文化部での出来事等が詳しく書かれ、1965年春に西藏を訪問したときには、西藏の歴史、自然、政治、人心等々、あらゆる情報が大変詳しくに残された⁴⁶。冬には冬季訓練が行われるが、毛沢東選集などを読んで討論した話、党支部書記の言葉や評価などが詳細に記録されている。

日記は村の会館（公所）で、または個人宅で寝る間を惜しんで書いたり、牛車での移動の休憩時間に書いたり、ときにはほかの人に解説を任せておいてその隙に書いたりもした。また、長春、北京、西藏に行くときには、列車の中や賓館でも書いていた。

第2に、ほとんどの日記は公開されることを前提に書かれた。第2章で紹介したように、第1～82巻の日記は「私生活記」であり、「死ぬ時も棺の中に入れて持っていくという世のいかなる秘密もすべて書くという自白書、生の記録」であった。誰の目も気にせず内面世界を記録することができたのである。第83巻（1963.7.28-10.3）も同様である。しかし時が経つにつれ、日記帳を和龍県映画放映管理所の党支部書記や吉林省の担当所長などが読むということを意識しながら書くようになった。

⁴⁶これについては、廉仁鎬（2013c）を参照。

では、いつから海元の日記を上官たちに見せるようになったのか。吉林省の担当所長に日記帳を見せるきっかけとなった出来事が、日記に書かれている。

1964年4月、第1放映隊が8戸しかない虎谷村に行ったときのことである。これには吉林省映画管理处の宋処長（漢族）と新聞記者が同行した。宋処長が映画解説の活動で困難な点があれば教えて欲しいと述べると、海元は必要であれば「日記があるので」それにもとづいて時間をかけて整理することができるかと答えた。このように答えたことで、日記を書いているという事実が「暴露」されてしまった。宋処長は、当時の日記には「秘密はないか」と質問し、海元は「無いと答えた」。宋処長はならば見せて欲しいといい、それから海元はしばしば日記の閲覧を許した⁴⁷。

和龍県映画放映管理所の党支部書記（鄭利敦）に対していつから日記を見せるようになったのか、現在は知ることができない。ただ、1964年5月27日付の日記によると、この日海元は支部書記に会っている。支部書記との別れ際に、海元は「日記帳2冊をその場に置いて来ようとしたが、そのまま下りてきた」と書かれている。したがって、同日以前からすでに日記は見せていたようである。一方、同月30日付の日記には、「この日記帳に‘一切は党へ！’という文章を1か月書いて鄭書記に差し上げる」とある。それにつづいて鄭書記宛の手紙という形式の比較的長めの文章が書かれている⁴⁸。支部書記の閲覧が前提された日記の執筆であったことがここからもわかる。

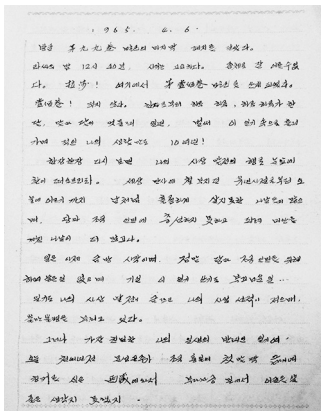
他方、1964年7月10日付の日記には、支部書記から日記帳をもってこいと指示されたのでこの日西城の家に来たとある〔西城是和龍県の市街地名。当時海元の家が西城にあり、日記帳をそこに保管していた〕。支部書記は、吉林省の宋処長の「要求」にもとづいてそのような指示を出したのだという。海元

⁴⁷『日記』1964年4月7日付。

⁴⁸『日記』1964年5月30日付。

日記は、この時点で上官たちに回覧される日記としての性格をもっていたといえるだろう。1964年10月28日から同年11月25日までの出来事を記録した第95巻の日記帳の最後のページには、「支部書記」が「ご覧になって私が真正な人間になるよう、党の素晴らしい息子となるよう、批評と指導をしてください」と書かれている⁴⁹。海元は翌1965年の春、西藏に行く途中の北京で、また拉薩に着いてからも、日記帳を支部書記に送った⁵⁰。

このように、上官にささげる日記になってからは、文章がきれいに清書されている。第83巻では判読不可能なほど悪筆でかかれたものが多かった。ときには酒を飲んで書いたのか、ひどい感情の起伏が見られることもあった。ところがある時期からは、公開を前提とした、きれいに清書された日記が書かれはじめた。公開を前提としているだけに内面世界をあるがままに描写するのは難しかったであろう。当然、異性の問題や恋愛感情のような内容は入り込む余地がなかった。



100冊目の日記の最初のページ
(1965年4月6日、
西藏拉薩ポタラ宮前宿所にて)

⁴⁹『日記』1964年11月25日付。海元はこの日記帳を1964年11月29日に長春の「省公司同志」に送った(『日記』1964年11月29日付)。

⁵⁰『日記』1965年4月6日付。

海元は自分の日記を上級の指導者たちに読ませるために提供しただけでなく、海元自身も10代後半の農村の青少年たちに日記を勧めたり日記を読ませてもらったりしていた。それは次のような経緯をたどった。

先述のように、海元の放映事業は中国の社会主義教育運動とともに展開されたものである。その一例として、「李双双に倣う」ことが挙げられる。「李双双」とは、映画「李双双」の主人公（女性）の名前である⁵¹。日記によると、「社会主義、集体主義教育にもっとも良い映画」である「李双双」を上映することで、とくに農村女性たちをして李双双おばさんのように「集体財産を自分のもののように大切に、集体生産を自分の家の事のようにし」、「集体に有害な一切の減少に対して容赦なく」「鋭く批判する」「堅潔な集体利益の守護者」となるよう誘導した。とくに各生産大隊の映画放映管理所では、「わが生産隊の李双双」を選抜し、彼女に倣う運動を展開した。

このとき、第1放映隊の地区から「李双双」として選抜された人物としては、「虎谷のチェ・ブノク [최분옥]、蘆果のキム・フゴム [김후검]、梨樹西湖のアン・ミョンオク [안명옥]」などがいた⁵²。日記によると、「彼女たちは幻灯で培養した人物」、すなわち第1放映隊が幻灯機を使って彼女たちの先進事例を評価し育成した若者たちであった⁵³。このように選抜され育成される青少年たちに対して、海元は日記を書くことを求め、または日記を自分に見せることを要求した。例えば1964年4月、西湖でアン・ミョンオクに会った海元は、「今日から」日記を書くよう「要求」した⁵⁴。また、翌1965年2月にはチェ・ブノクに会い、「日記に秘密があるか」と問い、無

⁵¹ 映画「李双双」の内容については、廉仁鎬（2013b）を参照。

⁵² 『日記』1963年10月30日付。

⁵³ 『日記』1963年10月30日付。移動放映隊は、映画の上映に先立ち、幻灯機を使って各種の宣伝事業を行った。

⁵⁴ 『日記』1964年4月30日付。

いと返事を聴いたうえで「では私が見られるよう〔自分に〕渡せ」といって日記を読んだ⁵⁵。

もちろん、それ以外にも海元日記には青少年の日記をみたことが記されている。1964年4月のある日の日記によると、ある村に宿泊した際に海元は学生がもってきた日記を読み、その感想を書いたという⁵⁶。

他人に日記の執筆を勧め、それを受け取って読み、そして自分の日記を上官たちに提供することは農村社会主義教育運動期に広範にみられた現象の一つであった。それはとくに「雷鋒に倣う」運動の一環としても展開された。毛沢東と共産党への信念が固く、共産主義の道德律を熱心に実践した雷鋒（1940-1962.8）の死後である1963年3月、毛沢東は「雷鋒に倣え」と人民に訴え、以後その運動は全国に広まった⁵⁷。「雷鋒に倣う」一貫として「雷鋒を見習って」「日記を書く運動」は各級の学校と軍隊で広く流行した。運動が行われた期間は、雷鋒がやったように日記を書き、同僚たちと日記を回し読みし、互いに指摘をし合った⁵⁸。海元は自分の日記帳の随所に「雷鋒日記」をまるごと写し、雷鋒に倣おうと努力した⁵⁹。要するに、農村社会主義教育運動の時期には、海元日記も日記が公開される風潮の影響を受けていたのである。

第3に、この時期の日記の執筆は身分上昇の一つの手段として機能した。それは、日記を上官、とくに党支部書記が閲覧することができたことによる。先述のように北朝鮮と中国のあいだで揺れていた海元の指導と定着に

⁵⁵ 『日記』1965年2月5日付。

⁵⁶ 『日記』1964年4月28日付。

⁵⁷ 雷鋒については、陳廣生・朱亜南『雷鋒全傳』（北京：解放軍文藝出版社、2012）を参照。

⁵⁸ 양한순 「가짜 논쟁에도 불구하고 다시 기억되는 레이펑」 『동아시아 브리프』 7(2), 2012, 40쪽.

⁵⁹ 例えば、1964年4月15日の日記には1962年4月15日の雷鋒日記が、1964年4月18日の海元日記には1962年4月16日のそれが、1964年5月17日の日記には1961年5月14日の雷鋒日記が、そして1964年5月21日の日記には1961年5月20日の雷鋒日記の一部がそれぞれ転記されている。

果たした党支部書記の役割は大きい。この時期の日記帳には、支部書記に送る手紙という形の文章が非常に多い。その例として、先述の日記第95巻（1964. 10. 28-11. 25）と第98巻（1965. 2. 8-3. 14）を挙げることができる。この日記帳の最後のページは、支部書記に宛てた手紙ですべて埋まっている⁶⁰。

これらの手紙形式の文章で、海元は支部書記に自分の胸の内を「全て」さらけだしている。入党したいという切実で「率直な」気持ち、または自分を信じて欲しいと訴える内容が随所に見られる。それらの手紙形式の文章では支部書記に対する無限の信頼と尊敬が表現されており、支部書記に対して「忠誠」を誓う文章も非常に多い。

実際海元は、自分の本音を支部書記にすべて伝えようとしていたのかもしれない。本当に支部書記を無限に信じ、従おうとしたのかもしれない。父親に求められなかった抛り所を別の誰かが埋めてくれることを望んできた海元は、支部書記にそれを期待していたのかもしれない⁶¹。支部書記に本音を打ち明ける文章を書きながら感情が込みあげ、日記帳を涙で濡らしたこともあった。その涙の痕の一部は、今も染みになって残っている⁶²。しかし冷静に考えると、このような書き方は身分上昇のための行為としても理解できる。

1966年5月の文革勃発とともに海元と支部書記の関係が回復不可能なまでに悪化したとすると、このような手紙形式の、本音を打ち明けるような書き方は支部書記に悪い意味で解釈された。支部書記は、海元が「支部に媚びへつらって入党した後、朝鮮に行こうと」したと非難した⁶³。または

⁶⁰『日記』1965年3月14日付。

⁶¹1964年2月27日の日記には、「過去には兄貴！兄貴と朝鮮に向けて想い、救援の両手を差し出したが、今は夜深くに寢床についても『鄭書記』『虚弱な体』『鋼鉄』『オストロフスキー』と考えるようになり」とつづっている。

⁶²『日記』1964年5月30日付。

⁶³『日記』1967年4月23日付。

「媚びへつらって入党し、朝鮮に行こうと」して「日記に」支部書記は「生命だの何だの」と書いたのだと非難した⁶⁴。文革期に入ると、それまで日記に書かれていた支部書記に対する敬意の表現や忠誠の誓いは、身分上昇のためのゴマすりとして罵倒されたのである。

しかし海元の方も、文革期にはそれを否定はしなかった。1967年4月23日付の日記によると、自分は過去に支部書記によって「誘惑、利用」されたという。支部書記が名誉を得るために自分が利用されたといい、「また私の私心(?)が悪用されたという面もある。彼を担ぎ上げていた」と述べた。海元は自らの私心、すなわち私欲を満たすために支部書記をもてはやしていたというのである。海元はつづけて次のように述べた。支部書記に会う前に自分があまりに情けない生き方をしていたので、支部書記が自分に真の教育をしてくれると思い、彼に従う決心をしたという。「私心(?)」には私心と真心が混在していたということである。海元はしかし、支部書記に対するそのような感情は「幼稚な感情」であったと述懐した⁶⁵。

1年後の1968年7月2日付の日記には、「過去の日記のうち1964年のものを」読み返し、「幼稚であることこのうえない日記であり、嘘が多く、どうしようもない」と評価した⁶⁶。支部書記に対する感情表現が幼稚だけでなく、ほとんどが偽りであったという意味であろう。このような文革期の言及は、必ずしも正しいものではないのかもしれない。支部書記の打倒が目的となっていた時代の日記という点が考慮されねばならないからである⁶⁷。しかしいずれにせよ、支部書記の閲覧を前提に書かれた日記が身分

⁶⁴『日記』1967年4月24日付。朝鮮、すなわち北朝鮮に行こうとしたというのは、文革当時の雰囲気に乗じた支部書記の海元に対する謀略であった可能性が高い。しかし日記を通じて支部書記に「媚びた」という点は、必ずしも間違いではなかったといえる。

⁶⁵『日記』1967年4月23日付。

⁶⁶『日記』1968年7月2日付。

⁶⁷文革終結後しばらくして、海元は社会主義教育運動の時期の日記がもっとも価値があると評価した。

上昇の一つの手段として利用されたという事実は否定できないだろう。

4. プロレタリア文化大革命の時期

(1) 海元の文革と国家の文革

1966年5月から1976年10月まで10年間つづいたプロレタリア文化大革命は、中国の国家と人民に大きな災難をもたらした。それは海元の人生にも大きく影響した。彼は文革の被害者でもあったが、加害者でもあった。

一般に文革は、北京大学で聶元梓らが壁新聞（大字報）を掲示したことにはじまると理解されている。1966年5月25日、壁新聞掲示の報はマスコミを通じて全国に伝わり、これを契機に大鳴、大放、大字報、大弁論などの四大運動が起こった⁶⁸。

延辺では、文革の工作組が単位（職場）に入り込んで活動することで、はじめて人々は文化大革命を実感した。延辺大学には同年7月12日に文革工作組が進出し、四大運動の展開を訴え、それに呼応して教員と学生たちは大学の党委員会書記や個々の教授の批判をはじめた。党中央の方針変更によって1か月ほど後に工作組は大学から撤収した⁶⁹。海元の職場である和龍県映画放映管理所には、延辺大学よりもやや早い7月4日に工作組がやってきた。

海元は文革に大きな期待を寄せた。それまで海元は党員になることを熱望してきた。彼は自分が非党員であることに対してひどく劣等感をもってきた。1965年上半期に西藏に行き藏族青年たちを教育したが、彼らの一部は党員であった。非党員が党員を教育しなければならないという事実に、

⁶⁸ 中国朝鮮族歴史足跡叢書編委會編『풍랑』北京：민족출판사, 1993, 283쪽.

⁶⁹ 延辺大学における文革については、鄭判龍『고향 떠나 50년』(北京：민족출판사, 2003, 40-301쪽)を参照。

彼はひどく苦しんだ⁷⁰。解説員（弁士）としての名声が高まるにつれ、非党員である自分の「身分」を恥じた。競争関係にあった映画放映管理所の同僚が入党したという知らせを聞いたときにも、もちろん悩んだであろう⁷¹。入党には支部書記の推薦が必要であった。海元は入党志願書を支部書記に提出したこともあった⁷²。

しかし、海元との面談を通じて、とくに海元日記を通じて彼の過去の行跡や考えを把握していたであろう支部書記の立場からすると、不法に北朝鮮に渡ったことのある海元を簡単に信用して入党させるには躊躇される面が多少はあったはずである。海元自身も北朝鮮訪問の事実が公開されるのを大変嫌がっていた⁷³。

入党問題で解決の見込みが立たないことに焦った海元は、だんだんと支部書記に対して不満をもちはじめ、それは行動に現れるようになり、それによって両者の関係は悪化した。1966年1月10日、海元は支部書記に「10余個の問題を提起」したという⁷⁴。問題点を指摘するこのような姿勢は、従順だった以前の態度とは異なっていた。これに対する支部書記の反応は非常に荒々しかった。海元の問題提起に対して支部書記は「聞きたくなく、不快感を露わにして、唾を吐いて出てきた」り、「聞きながらあまりにも吐き気がして」「廊下に出て」座り込むという反応を見せた⁷⁵。それから4

⁷⁰『日記』1965年3月15日付。

⁷¹1965年9月27日には、和龍県映画放映管理所に党支部委員会が設置された。この頃、2人の同僚が入党した（『日記』1965年10月27日付）。

⁷²『日記』1967年4月23日付。

⁷³1964年4月6日、和龍県映画放映管理所長（イ・フンソク）が吉林省幹部のいる場で海元が北朝鮮に行ってきたという事実を公開すると、海元はひどく腹を立てた（『日記』1964年4月7日付）。管理所長からすると、弁士として有名になっていく海元が北朝鮮に行ったことがあるという事実を上官たちにあらかじめ公開することで、遅れて知られることになるときのリスクを回避したかったようである。

⁷⁴『日記』1967年4月24日付。

⁷⁵『日記』1964年4月24日付。

日後の1月14日の日記で、海元は「支部書記は私を信じているようでもあるし、信じていないようでもある」と感じ、「信じようが信じまいが、私は一介の支部書記のために革命をする人間ではない以上、私に関わるべき問題ではない」と冷めた筆致で記録している⁷⁶。

海元は文革に能動的に参加すれば、このように行き詰まった自身の身分を一気に高めることができると判断したようである。同年7月1日、海元は学習の一環として書いた大字報で、「戦線（火線）」入党、すなわち戦闘中に成果をあげて入党を勝ち取るという抱負を述べた⁷⁷。工作組来所前日の7月3日の日記で海元は、「彼〔海元自身のこと〕が黨員であろうがなかろうが、彼が職位があろうがなかろうが、高かろうが低かろうが、彼が名声があろうがなかろうが」、「今回の無産階級文化大革命にどのように対応し、どのように対処するかで、彼が本物か偽物か、本当の革命家か偽の革命家かははっきりと区別される」と考えた⁷⁸。文革を利用して行き詰まった身分を劇的に改善しようとしたのは、海元だけでなく、当時の中国社会に多く見られた現象でもあった⁷⁹。

工作組がやってきて四大運動の呼びかけが始まると海元はすぐにこれに呼応し、映画放映管理所の党支部書記と管理所長の批判をはじめた⁸⁰。

しかし、それによって海元は逆風にさらされる。海元の批判に対して彼らは海元の北朝鮮訪問の事実をリークした。とくに支部書記は「媚びへつ

⁷⁶『日記』1966年1月14日付。

⁷⁷『日記』1967年3月24日付。

⁷⁸『日記』1966年7月3日付。

⁷⁹北京大学の歴史学界内部で文革以前に老教授と若手研究者のあいだに葛藤が存在していたが、文革が勃発するとこれを老教授打倒の機会として利用されたという。王元周「학내 모순과 문화대혁명의 사회적 요인 - '문혁' 이전 대학 내 역사학 연구자 사이의 모순을 중심으로-」『중국근현대사연구』32, 2006.

⁸⁰『日記』1967年4月23日付。

らって」入党した後で朝鮮（北朝鮮）に行こうとしたという情報を流し⁸¹、それによって海元は攻撃を受ける立場に立たされた。入党後の北朝鮮行きについて1963年10月の日記に書かれていたことは、すでに見た通りである。一方、支部書記はこのほかに、海元の書いた日記の内容をもちだして攻撃した。先に見た1966年1月14日の日記に登場する「鄭書記同志は私を信じているようでもあるし、信じていないようでもある」という話を周囲に流した。党支部書記を信じられないというのはすなわち「党支部に反対すること」であり、それは「党に反対すること」として拡大解釈された⁸²。反党的人物として攻撃されたのである。これらの2つの点が問題となり、海元の日記は彼自身に襲いかかってくる凶器となっていたのである。

文革の工作組、それを派遣した現党書記などの幹部たちも、海元ではなく支部書記の肩をもった。彼らは海元のように問題のある人物を摘発し批判することこそ、工作組のなすべき任務と考えていた⁸³。

1か月後に工作組は撤収したが、年末まで日記が中断されていたところをみると、海元の境遇はさほど改善されたわけではないようである。海元は状況を見誤り、失敗したといえる。

海元は文革の全体状況をしっかりと把握せず、自身の進路を決めるため1966年末から大串連（関係づくり）〔大交流。革命を全国に拡大させるため、紅衛兵が北京をはじめ全国の都市や農村を訪問しながら行った文革期の一大交流運動。〕をはじめた。串連は文革のもう1つの顔であった。延辺大学の人々は10月頃に串連に出かけたが、海元はそれよりやや遅れて出発した。

北京と長沙を経て、1967年1月3日に湖南省韶山にある毛沢東の生家を訪問して感激の涙を流し、「革命に罪はなく、反乱には道理がある」という

⁸¹『日記』1967年4月23日付。

⁸²『日記』1967年4月24日付。

⁸³『日記』1967年4月24日付。

「毛主席の言葉を永遠に忘れない」と決心した⁸⁴。翌日、海元は毛沢東が若い頃に書いた「湖南農民運動考察報告」を学習した。そしてそこに登場する「革命は客人をもてなすことでもなく、文章をこしらえることでもなく、絵を描いたり刺繍遊びをすることでもないの、そのように優雅に、そのようにおっとり、落ち着いた、そのように大人しく、控えめにはなしえない。「革命は暴動であり、一つの階級が他の階級を転覆する猛烈な行動である」という文句をとくに胸に刻んだ⁸⁵。この日の夕方、海元は「劉少奇、鄧小平の資産階級反動路線を徹底的に打倒」することを決意する。

韶山を発った海元は、ふたたび革命の聖地井冈山へと移動した。そしてその地の革命博物館や記念塔を「巡礼」した⁸⁶。上海、北京を経て、同月末に和龍に帰ってきた。海元は、「韶山で革命反乱精神と、井冈山で革命の火花をもち帰った」と今回の串連あるいは巡礼について意味づけを行った⁸⁷。海元は、広くは延辺、狭くは職場である映画放映管理所内で反乱（造反）闘争を熾烈に展開することを決心したのである。

海元の帰還当時、延辺では各地で数個の反乱団が結成され、互いに激しい闘争を繰り広げていた。反乱団の起源は前年8月にまでさかのぼる。同月、延辺大学で「8.27」と「紅連」という2つの反乱団が組織された。紅連は既存の体制を擁護する保守的な色彩をもち、8.27は既存の体制を否定的にみる急進性をもっていた。その後延辺各地に組織された反乱団は、8.27系統または紅連系統に分類される。1967年の春から夏にかけて紅連は白・工・抗へ、8.27は新8.27と紅色へと分化した。海元が所属していた映画放映管理所でも、映画の上映はほとんど放置された状態で、40余名の所員たちは政治闘争の渦中へと自発的に飛び込み、または非自発的に巻き込まれ

⁸⁴『日記』1967年1月3日付。

⁸⁵『日記』1967年1月4日付。

⁸⁶『日記』1967年1月16-17日付。

⁸⁷『日記』1967年4月3日付。

ていった。

帰還した海元の反乱は、徹底的に支部書記に反対し、既存の秩序を打ち倒す方向で進められた。支部書記は海元に紅連系の反乱団に入るよう勧めたが、8.27を支持していた海元はそれを拒絶した。1967年2月8日には、8.27系の学生が和龍映画館に立ち入り、映画放映管理所に対して反乱をおこなった⁸⁸。これにより、支部書記中心の体制は崩壊したようである。海元はその学生たちの行動を支持した。

しかし状況が有利になったわけではない。学生たちが退くと、紅連派が大勢を占めていた映画放映管理所で海元は孤立してしまった。同年3月27日の日記には、映画放映管理所の「40名中」自分は独りであり、発言権は剥奪され、会議への参加も妨害されているとある。当時海元は40対1の立場におかれ、「飯を食う自由、睡眠をとる自由もなく、組織を抜ける自由」も「喋る自由」もなかったという⁸⁹。4月になると、海元にはわずかな「言論の自由」が与えられた⁹⁰。

そんななかでも、既存秩序に対する海元の反乱は継続されたことが日記に赤裸々につづられている。まず、支部書記との関係を清算した。前章でみたように、このときに海元は過去の自分が支部書記から「誘惑、利用された」と考えた。「名誉、地位を勝ち取」ろうとした支部書記の「利用物」にされたと思った⁹¹。一方で、これもすでにみたように、海元自身にも「私心(?)」があったと述懐した。

4月23日の日記では、過去の自分は鄭書記を「支部書記として信じて日記を送った」のに、そのような行いは支部書記の「奴隷」に進んでなろうとした自身の「資産階級の個人主義の表現」であったと反省した。「私心」

⁸⁸『日記』1967年12月31日付。

⁸⁹『日記』1967年12月31日付。

⁹⁰『日記』1967年12月31日付。

⁹¹『日記』1967年4月23日付。

とは、個人主義でもあった⁹²。同じ日の日記で海元は支部書記に、「入党自願書を書いたこと」は支部書記に忠誠を誓う「奴隷」になることで、それも自身の「個人主義思想の産物」であったと評価した。日記の最後で海元は、「過去は0だ。鄭利敦との関係も0だ!」、支部書記の資産階級的反動路線を「徹底的に反乱（造反）する」と宣言した。

支部書記との誤った関係を清算しただけでなく、彼の指導のもとに行なわれた第1放映隊の活動もまた否定的に総括された。海元は、和龍第1放映隊は「革命のため、人民のため」に組織された隊伍ではなく、中央の劉少奇にはじまり、延辺自治州の朱徳海^{チュドッケ}、そして和龍県の党書記金明^{キムミョン}、和龍県映画管理公社の鄭利敦書記へと連なる執権派の修正主義路線を実践した道具であったと断じた⁹³。このような海元の評価は、既存の秩序を覆す当時の中国の一般的な風潮を映画放映管理所にも適用したものと見える。このような否定的評価がもとになり、しばらくして映画放映隊は一時、毛沢東思想宣伝隊に改名されました。

夏には、延辺各地の反乱団の派閥闘争の構図が大きく変化した。延辺に駐屯していた軍隊が8.27の後身である紅色派閥を支持したことで、大勢は次第に紅色が掌握しはじめた⁹⁴。反8.27勢力の強かった映画放映管理所でも、11月には紅色が40%を占めるにいたる。8.27の後身の紅色に属していた海元の活動の幅は、その分広がった。海元は新しい秩序の樹立をめざす局面で、映画放映管理所側の紅色代表としてさまざまな活動に参加した。

しかし翌1968年4月から階級隊伍の整理運動がはじまり、海元の地位は

⁹²『日記』1967年4月23日付。海元はここにきて、それらの日記帳をすべて返却するよう求めた。

⁹³『日記』1967年4月24日付；1967年5月26日付。党書記金明については、김주영 『줄리아의 가족 순례기』 제2부 (도서출판 레드우드, 2015) を参照のこと。

⁹⁴廉仁鎬 「傳單」을 통해서 본 중국 延邊地方 文化大革命과 派閥闘争 『延邊 朝鮮族 社会의 過去와 現在』 高句麗研究財団, 2006, 211~217쪽.

再び急落した。この整理運動の過程で捕まった「階級の敵」は延辺だけで数万名にのぼり、運動によって撲殺された者、障がいを負った者、投獄された者はおよそ2千名を数えたという。そのほとんどは、まったく根拠のない理由で反逆者、外国特務などの濡れ衣を着せられたものだという⁹⁵。ここでの「外国」とは主に北朝鮮をさす。

北朝鮮への不法入国の経歴をもつ海元もこれに引っかけた。彼に対しては、文学作品を書いて北朝鮮を訪問し、そこで「反華の頭目」石東洙に会い、石から指令を受けて中国に戻ってきたという疑いがかけられた。それに対して海元は積極的に弁明した。作品を書いてもって行ったことはなく、石東洙に会ったこともなく、したがって指令を受けたこともないと主張した。しかし2章で述べたように、北朝鮮祖国観や金日成崇拜の内容を含む1962年の日記は、北朝鮮特務であることの「証拠物」となってしまった。これにより1968年8月10日には、「打倒朝鮮修正主義、特務民族主義分子」という看板を首にかけ、街頭で群衆の批判を受けるはめになった⁹⁶。そして1年間の獄中生活を強いられた。

国家は文革という大乱に乗じ、北朝鮮や朝鮮族との関係の問題を暴力的に解決した。1961～62年の段階では朝鮮族の脱中入北について、毛沢東、劉少奇など国家の中央指導者たちは「外流」という穏健な表現を使い問題視しない態度を取っていたが、それは当時悪化していた中ソ、中印関係、そして朝中友好関係に配慮していたからであろう。しかし国家の重要指導者たちは、文革時に北朝鮮や朝鮮族との関係を修正しようとし、それは悲劇的なかたちで展開していった。

北朝鮮に不法入国したことのある者、北朝鮮を祖国と言ったり金日成を崇拜する者、そして北朝鮮に家族のある者などはほとんど弾圧の対象になっ

⁹⁵ 鄭判龍「연변의 '문화대혁명」『풍랑』北京：민족출판사，1993，306-307쪽.

⁹⁶ 『日記』1968年8月10日付；1980年2月3日付。

たものと思われる。朝鮮族人民は弾圧の口実を提供することを避けるため北朝鮮と距離を置かなければならず、金日成と北朝鮮体制を非難しなければならなかった。現存する海元の日記帳には、当時北朝鮮の兄に宛てた手紙の原稿が挟まっている。この手紙のなかで海元は、兄に対して金日成に反対するよう「扇動」している。当時北朝鮮の兄から送られてきた手紙や家族写真などとともに海元の日記が焼却されたのも、弾圧を避けるための苦肉の策であったろう。このような過程を通じて、朝鮮族人民は北朝鮮、あるいは朝鮮半島の人民とは異なる中国公民として再生しなければならなかったのである。

公開的な批判闘争と獄中生活を通じて「罪過」を償い中国公民として生まれ変わった海元は、ふたたび和龍第1放映隊の解説員に復帰した。1972年2月14日にはかくも熱望してきた入党が実現した⁹⁷。翌年には第1放映隊の解説員に加え隊長も兼任することになった。1976年に毛沢東が死亡すると、間もなく海元の北朝鮮特務の嫌疑は晴らされた。

(2) 「私心」と闘う場としての日記

10年にわたる文革期にも海元は日記を書いていた。しかし以前に比べると、それには次のような違いが見られる。

第1に、日記の執筆は連続的ではなく、断続的に行われた。文革勃発後にも書かれた海元の日記は、1966年7月3日でいったんストップする。文革工作隊が映画放映管理所に進入する7月4日から年末までの日記はない。日記をつけられる状況ではなかったのであろう。1967年1月1日からふたたび日記がはじまった。しかし、先述のように串連から和龍に帰還後、紅連系の反乱団に入らず⁸、27側についたことで少数派となり、それにより行動の自由が失われた。この時期、つまり2月から3月初旬～中旬の日記には、本

⁹⁷『日記』1973年2月14日付。

人の事柄に関する記述はなく、毛沢東の語録を抜粋した「最高指示」の内容で埋められていた。

個人的な日記は3月24日から再開される。このときから激しい派閥闘争と「執権派」打倒運動に参加したことなどが詳細に記録されはじめる。しかしそれも9月2日に中断する。それから2か月間日記が書かれられないのだが、今となってはその理由はわからない。日記は11月1日にふたたびはじまり、翌1968年9月1日でまた中断する。そして15か月半後の1970年12月中旬にまた再開する。

このように断続的にしか日記が書かれなかったのは、深刻な政治闘争の渦中であって日記を書ける状況ではなかったという点、そして「鄭書記時代」のように日記を詳しく読んでくれる人物もいなかったという点、とくに日記が相手派閥に押収されると困るという点などが主な理由であろう。そして、後述するが日記に対する態度も、この時期にはかなり変化していた。

一方、1970年12月から1976年の文革終結までの日記にはほとんど中身がない。日記としての内容はまばらで分量も少なく、党創建記念日のような日にメモ程度の簡単な記述があるだけというケースがほとんどであった。そしてハングルよりは漢語で書かれることが多かった。

日記の断続化とともに、日記帳のナンバリングの方法も変化した。文革勃発以前には「第84巻」「第85巻」のように、そして文革勃発当時の日記帳（1966.5.11-7.3）も「第113巻」となっている。ところがその後はこのような方式ではなく、「1967年第2巻」「1967年第3巻」という記載方法に変わった。落ち着いて文章を書くことのできない状況だったので日記も安定的に生まれるはずがなく、きちんと保管することも難しかった。このようなことが日記帳の番号の振り方にも影響したようである。

また、環境の劣悪さは日記帳の質にも現れている。文革期の2年間の日記帳は、冒頭でも少し触れたが、1966年には正規の日記帳が1冊、1967年

には正規の日記帳が7冊で非正規の日記帳が5冊あった。1968年には正規が3冊、非正規が2冊であった。ここでの正規の日記帳とは、カバーが分厚く、サイズは小さく、携帯するのに便利で質の良い150枚程度の用紙で綴じられた日記帳をさし、非正規の日記帳とはカバーが薄く、サイズは大きく、30数枚ほどの用紙で綴じられた一般の薄いノートをさす。

第2に、40数名の職場の同僚同士、さらには和龍県レベルで展開された派閥闘争の状況が詳細に記録されている。反乱団同士の派閥闘争は1967年6月頃になると互いに暴力で応酬する段階にいたるが、6月25日の日記には文革以前には非常に親密に過ごしていた職場仲間から無慈悲に殴打された事実が記録されている。その同僚は「椅子を床に叩きつけ、腕と脚の皮がはがれて腫れるようにし」、首とあごを絞めつけてはまた腕を後ろに締め上げ、「こいつをたたき殺してやる」といって叫んだと書かれている。派閥の違いを理由に同僚に殴られ、大量の涙を流したともある⁹⁸。

7月10日、和龍市内の映画館にいた海元らは夜間に中等学生の反乱団の攻撃を受け、このときもさんざんに殴られた。こっひどく殴られ3度も地面に倒れたが、彼らは襟首をつかんで無理やり立たせ、「こいつをぶっ殺してやる」といってぎりぎりど歯ざしりし、息が止まるほど首を絞めつけたという。もちろん、海元も職場の同僚を殴ったことがあり、その事実も日記に記されている。また、派閥同士の勢力図が変化する様子も、日記から見てとれる。海元が創設した反乱団「暴風」は極めて少数派ではあったが、職場の同僚で海元側に乗り換える者も出てくる様子が書かれており、大乱のなかで個々人は生存のためにどのように振る舞ったのかがよくわかる。

第3に、文革時の日記にはその形式に顕著な特徴が見られるのだが、それは「最高指示」という毛沢東語録を日記の冒頭に導入するというもので

⁹⁸『日記』1967年6月25日付。

ある。このような形式は、1967年1月1日からはじまり、文革終結時までつづいた。

文革時、毛沢東語録は非常に重要であった。鄭判龍によると、文革がはじまるとあちこちで毛沢東語録を暗誦する動きが出てきた。会議がはじまる前や、大きな行事があるたびに、主催者がまず何ページの何段落の言葉を読もうと提案し、それを全員で読み上げた。通常、実際に読まれたフレーズはその会議や行事と関係がありそうな内容だったという⁹⁹。牧師が説教の前に聖書の一節の朗読を提案するのと同様であるといえる。毛沢東語録が毎日日記に登場するようになり、以前書かれていた雷鋒日記はもはや影をひそめた。

このように冒頭に毛沢東語録が引用される前提には、それまでの日記に対する批判意識がある。1967年1月1日の日記によると、それまで書いてきた120冊余りの日記の内容は「すべて資産階級の反動路線との闘争にも軟弱無能」であり、「資産階級の修正主義の色彩」が残っており、「毛沢東思想で」武装するのに障害となる要素になっていると批判した。ここで「資産階級の修正主義」とは、前節でみた「資産階級の個人主義」、すなわち個人主義をさしていると思われる。それは3章でみた「私心」にも通じる概念であるといえるだろう¹⁰⁰。

過去の日記を読みなおした海元は、そこに自身の「私心」「個人主義」そして「資産階級の修正主義」が根を下ろしていることを「確認」し、それらは自身の毛沢東思想による武装を妨げたと考えたのである。そのような私心、個人主義、修正主義を放逐する手段として、毛沢東の言葉を日記の冒頭に引用したのである。

⁹⁹ 鄭判龍、前掲論文、2003年。

¹⁰⁰ その後海元は、「文化革命時の日記が」毛沢東「語録と語録の解釈のみで肉がなく、その時代が見えない」と指摘した（『日記』1990年4月7日付）。

第4に、文革時の日記は、内容面において闘私批修、すなわち「私」あるいは「私心」に立ち向かい、修正主義を批判する内容で埋まっておらねばならず、実際海元は多くの日記をそのように書いた。1968年7月2日の日記では、文革以前の日記はもちろん、数日前に書いた日記でも「いまだに真に毛主席の著作を学習活用した日記ではなく」「闘私批修の真の戦場になっていない」と反省した¹⁰¹。日記は自ら私心に対峙して闘争する戦場であらねばならなかったのである。

私心と闘う日記の一例をみよう¹⁰²。

毛主席よ！毛主席よ！（中略）

私は大きな罪を犯しました。私の頭の中にはあなたの偉大な思想がなく、ただ私自身があるのみで、党と国家の運命と前途に関心を向けるのではなく、ただ私自身の運命と前途に関心を向ける人間でした。

（中略）朝鮮という修正主義の国に行ってきました。（中略）

毛主席よ、毛主席よ！

なぜ過去にこのように（中略）資本主義、修正主義の復活の道歩んで国を裏切り、修正主義に投降する道を歩み、修正主義を追放できなかったのか。そのすべての原因は、頭の中に毛主席がなく、毛沢東思想がなく、毛主席の無産階級革命路線がなかったからです！

北朝鮮を訪問した自身の過ちは、毛沢東思想や毛沢東の教えの代わりに「自分の前途にのみ関心をもつ」、つまりは私心に支配されていたために起こったものと説明されている。私心を追放し、毛沢東思想で武装するために絶えず「毛主席よ！」または「毛主席万歳！万々歳！」と叫ばなければ

¹⁰¹『日記』1968年7月2日付。

¹⁰²『日記』1968年7月29日付。

ばならなかったのである。群衆集会場や群衆の見る大字報においてだけでなく、個人の日記においてもそれを叫ばなければならなかったのである。

実際には、人が私心と闘いそれを鎮圧・消去することは、宗教や神の領域に属することであろう。一般人では決して到達することのできない目標であろう。到達不可能な目標を成し遂げるために絶えず「毛主席」を呪文のように唱えなければならなかったのである。海元は後日、「毛主席よ！毛主席よ！」「毛主席万歳！」を叫んだ文革期の日記を、まるで裸の王様を誉めそやすアンデルセンの寓話のようであったと批評した¹⁰³。

5. おわりに

海元は小学校4年生の頃から日記を書きはじめ、ほぼ生涯をかけて書き続けた。本稿では、海元の人生と日記を関連づけて考察した。海元の人生が日記の内容にどのような影響を与え、逆に海元の日記もまたどのように海元の人生に影響を与えたのかを検討した。対象時期は毛沢東時代（1945-1976）のみを取り上げたが、さらにそれを次のように3つの時期に分類して考察した。

第1期は、解放から中国朝鮮族人民が大量かつ不法に北朝鮮に渡る1962年までである。この時期までの海元は、北朝鮮と中国のあいだで揺れ動いていた。実際に1957年と1962年の2度にわたって不法に北朝鮮を訪問する。この間、海元は他人の目を気にすることなく日記を書いていたので、心の内面世界がそのまま書き込まれていたものと思われる。そこには北朝鮮を祖国とみなし、金日成を民族の太陽と表現した記述もあるが、このような「不穏」な内容があだとなって文化大革命の時期に獄中生活を強いられた。またそれは、第1期の日記がすべて焼却される原因ともなった。

¹⁰³『日記』1988年1月1日付。

第2期は、農村社会主義教育運動の時期（1963-1966）である。この時期は映画放映隊の役割が大きく、優れた弁士であった海元は全国的に有名な人物として知られるようになった。この時期にも海元はほぼ毎日日記を書いていたので、それは膨大な量にのぼった。とくに自身の活動を忠実に記録した当時の日記は、日誌としての性格が強い。一方、この時期は日記を見せ合うことが奨励された時期で、海元もまた日記を上官たちに頻繁に見せていた。公開されることが前提となっていたので、海元は日記を丁寧書いた。また、彼は支部書記などの上官に読んでもらうことで彼らの信任を得、身分の上昇をねらった。当然、日記には上官に対する尊敬や忠誠の表現が多く登場した。しかし支部書記との関係が悪化すると、そのような表現は出世のための媚びた態度であったと批判された。

第3期は、文化大革命の期間（1966-1976）である。入党の願いを果たせなかった海元は、文化大革命が勃発するとそれに参加し、自身の地位を高めようとした。そして文化大革命工作隊の要請を受け、職場の支部書記などの幹部に対する非難を積極的に行った。しかし以前に読んだ海元の日記を通じて彼の弱点を把握していた党支部の幹部たちは、彼の北朝鮮への不法訪問の事実などを意図的に流し、海元を窮地に追いやった。

その後海元は毛沢東の生家、革命の根拠地である井冈山などを訪問し、文革にさらに積極的に参加するようになった。しかし1968年春から展開された階級整理運動で北朝鮮特務の嫌疑をかけられ、同年9月から1年間の獄中生活を強いられた。

人々がもれなく政治の舞台に登場し、そして日記がいつどのように奪取され罪証とされるかわからなかった当時であって、日記は連続的ではなく断続的に書かれた。そんななかでも派閥闘争についてだけは詳細に記録されていた。他方、形式面では毛沢東の「お言葉」が日記の最初に引用されるという特徴をもち、内容面では自己の私心と闘う内容で埋め尽くされていた。実際、人が私心と闘いそれを消し去ることは宗教や神の領域の間

題である。一般人としては決して到達することのできない目標である。その到達不可能な目標を達成するために、絶えず「毛主席」の名を呪文のように唱えたのである。

参考文献

○史料

『海元日記』(未公刊)

○著書・論文

- 김인섭 「在北 시인 閔丙均 연구 -북한 문단에서의 위상과 『閔丙均 시선집』을 중심으로-」 『국어국문학』 146, 2007.
- 김주영 『줄리아의 가족 순례기』 제2부, 도서출판 레드우드, 2015.
- 양한순 「가짜 논쟁에도 불구하고 다시 기억되는 레이펑」 『동아시아 브리츠』 7(2), 2012.
- 연변당사학회 편찬 『연변 40년 기사』 연길: 연변인민출판사, 1989.
- 廉仁鎬 「재만 조선인 항일투쟁사 서술과 ‘중국 조선족’의 탄생」 『동아시아 한국학의 분화와 계보』 소명출판, 2013. → 廉仁鎬 (2013a)
- 「조선족 변사 海元の 활동 분석을 통해서 본 1960년대 상반기 연변조선족 사회와 한반도와의 관계」 『한국근현대사연구』 67, 2013. → 廉仁鎬 (2013b)
- 「조선족 변사의 北京, 拉薩, 日喀則 訪問 日記를 통해서 본 서장 장족 사회의 변동 (1950-1965)」 『한국학논총』 39, 2013. → 廉仁鎬 (2013c)
- 『또 하나의 한국전쟁 -만주 조선인의 ‘조국’ 과 전쟁』 역사비평사, 2010.
- 「傳單」을 통해서 본 중국 延邊地方 文化大革命과 派閥鬭爭」 『延邊 朝鮮族 社會의 過去와 現在』 高句麗研究財團, 2006.
- 오성호 「趙基天 『백두산』 과 북한 서사시의 형성」 『상허학보』 11, 2003.
- 王元周 「학내 모순과 문화대혁명의 사회적 요인 -‘문혁’ 이전 대학 내 역사학 연구자 사이의 모순을 중심으로-」 『중국근현대사연구』 32, 2006.
- 이지호 「‘윤복이 일기’의 재평가」 『문학교육학』 17, 2005.
- 이흥길 「뇌봉 (雷鋒) 학습운동과 그 배경」 『역사학연구』 10, 1996.
- 鄭炳旭 「식민지 불온열전: 미친 생각이 뱃속에서 나온다」 역사비평사, 2013.
- 鄭判龍 「연변의 ‘문화대혁명」 『풍랑』 北京: 민족출판사, 1993.
- 『고향 떠나 50년』 北京: 민족출판사, 2003.
- 中共延邊州委組織部的 編著 『중국공산당연변자치주 조직사』 연길: 연변인민출판사, 1991.
- 中国朝鮮族歷史足跡叢書編委會編 『풍랑』 北京: 민족출판사, 1993.
- 陳廣生·朱亞南 『雷鋒全傳』 北京: 解放軍文藝出版社, 2012.
- 和龍県地方志編纂委員會編 『和龍縣志』 長春: 吉林文史出版社, 1992.

オインジェ
(吳仁濟 訳)